

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

**第31回** (2021年9月)

多民族社会としての石垣島から考えるSDGs

ジャーナリスト 松田 良孝



筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

---

**第31回** (2021年9月)

多民族社会としての石垣島から考えるSDGs

ジャーナリスト 松田 良孝



---

# 講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズ 公開講演会「多民族社会としての石垣島から考える SDGs」の刊行に寄せて

白山 利信

筑波大学人文社会系長・NipCA 実務責任者  
文部科学省受託事業「日本留学促進のための海外ネットワーク機能強化事業  
(CIS [中央アジア・コーカサス] 地域)」責任者

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」は、2019年1月、文部科学省「大学の世界展開力強化事業 (ロシア)」の本学の採択事業「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」(2014-2018)の成果とノウハウを引き継ぎ、新たなミッションを担ってスタートしました。

NipCA プロジェクト主催の公開講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズは、新型コロナウイルスが収束しない中で活動を継続した当プロジェクトの3年目の取り組みです。本冊子は、通算で第31回目になる「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会「多民族社会としての石垣島から考えるSDGs」の全体を収録したものです。まず講師を務めて下さった松田良孝氏に対して深く感謝申し上げます。なお、当該講演会は、日本言語政策学会多言語対応研究会の共催として実施しました。松田良孝氏を紹介して下さいました(当時)日本言語政策学会会長で、麗澤大学大学院言語教育研究科の山川和彦教授に対しても心から御礼を申し上げます。

本講演では、埼玉県ご出身の松田氏が20年間、ジャーナリストとして石垣島に暮らし、その社会と人々を、本島から来た者としての外部者の視点と、島に根付いた住民の視点の双方から眺め考察し発見した数々の知見、特に地理的に近い台湾との歴史的背景から生まれた台湾出身の島民との知られざる関わりや、集落ごとの島民の出自の違いや特殊性から市町村よりも小さな住民集団(相互扶助共同体)の単位である大字の「大字史」や小字の「小字史」を刊行するという独自の郷土史編纂文化を連綿と形成していることなどの重要性を指摘されています。おそらく多くの読者は、本冊子を読んで、石垣島の多言語性、多民族性、多文化性の実在と実相に新鮮な驚きと、日本社会自体の多様性にもあらためて気づくことでしょう。日本の地方創生への取り組み戦略、ひいては、将来の、日本人を中心とする多文化共生社会の到来などを見通すとき、松田氏の話から非常に多くの示唆を得ることができると確信します。

本書は、筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」の助成を受けて刊行されたものです。本プロジェクトに対して日頃より温かいご支援とご助言を賜っている、日本財団の笹川陽平会長、森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、勝俣創介国際事業部チームリーダー、同事業部の松尾雅子氏に対して、衷心より感謝申し上げます。

公開講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズは、できる限り多くの講演内容を広く社会に発信するために冊子化を予定しています。今後もNipCAプロジェクトの講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」にどうぞご期待ください。

最後に、諸事情から本冊子の刊行に約3年半の月日がかかってしまったことに対しまして、講演された松田良孝氏に深くお詫び申し上げます。

---



**山川** 本日、司会を務めます、山川です。最初に、筑波大学の白山先生よりごあいさつを頂きます。白山先生、よろしくお願ひします。

**白山** ありがとうございます。定刻になりました。筑波大学人文社会系教授で、グローバルコミュニケーション教育センター、ロシア・中央アジア地域責任者をしていただきます。また、筑波大学「日本財団 中央アジア日本人材育成プロジェクト (NipCA)」の実務責任者もしています。それでは、恒例ですが、私からごあいさつと本日の公開イベントの趣旨説明をさせていただきます。少し前置きが長くなりますが、どうかご了承いただければと思います。

本日の公開講演会は、筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」が主催組織となっています。日本・中央アジア友好協会 (JACAF)、本学の国際局、学生部、グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会、SGU 事業推進室、グローバルリーダーシップ教育プログラム、人文・文化学群、社会・国際学群、アルマトイオフィス、タシケントオフィスが協力組織となっています。

アルマトイオフィスは、中央アジアのカザフスタン共和国の旧都、アルマトイ市にある本学の海外拠点です。タシケントオフィスもウズベキスタン共和国の首都、タシケントにある本学の同じく海外拠点になります。今回の講演会には、中央アジア出身の本学の卒業生や現地の大学間交流協定締結大学の教員も参加しており、今後はこれまで以上に海外の参加者も増やしていきたいと考えています。

当該イベントは公開講演会ということで、NipCA プロジェクトの社会貢献活動の一環という位置付けになっていますが、さらに国際社会貢献という意義付けも付与できると考えている次第です。

筑波大学「日本財団 中央アジア日本人材育成プロジェクト」では、中央アジアと日本を自在に行き来し、当該社会の発展のために活躍できる人材育成に取り組んでいます。将来のキャリアパスに役立つテーマを選んで、中央アジア出身の留学生および日本人学生が日本の国内事情、中央アジア社会の諸課題、世界のSDGs達成に寄与する取り組みなどをより深く理解するための貴重な機会として、「中央ユーラシアと日本の未来」と題する公開講演会をシリーズとして実施しています。

さらに、本日の公開講演会は、筑波大学「日本財団 中央アジア日本人材育成プロジェクト」と日本言語政策学会多言語対応研究会との共催になっています。第26

回の講演会では、「SDGs と多文化社会—先駆的な試みを行う北海道ニセコ町—」と題して、山本契太ニセコ町副町長とニセコ高等学校の中谷知記先生にご講演をいただき、多文化共生時代の到来を先取りする取り組みを紹介していただきました。

本日の第31回講演会は、その続編とも言うべきものです。現在、日本の地域社会、北は北海道から南は沖縄まで各地において、観光客としての外国人、住民としての外国人が年々増えてきています。ただ、昨年と今年は人類全体が苦しんでいる新型コロナウイルスの感染拡大のただ中にあり、人の移動、それに伴う人的交流が大きく制限されていますので、その関係で減少しているかもしれません。

外国人の多言語対応というテーマは、日本社会の今後、非常に大きな社会的な課題になることが予想されます。

その意味で、今回のご講演も多文化共生のための言語政策について考えるためのヒントを数多く得られるのではないかと考えています。この多文化共生時代の到来を見据えた対応は、社会全体でおそらく遅かれ早かれこれから考えていかなければならないという共通の問題意識から、本プロジェクトと日本言語政策学会多言語対応研究会とが協力・連携する形で今回の公開講演会を共催しています。

本日も司会兼コメンテーターには、日本言語政策学会会長でいらっしゃいます麗澤大学教授の山川和彦先生をお招きしています。第31回目の講演会となる今回は、「多民族社会としての石垣島から考えるSDGs」という大変魅力的なテーマで、十勝毎日新聞社、八重山毎日新聞社の記者として長く活躍された著名な気鋭のジャーナリストで、現在は台湾を拠点にフリーの立場で取材活動をされている、松田良孝先生をお招きいたしました。南山舎から出版された『八重山の台湾人』というご著作で、沖縄タイムス出版文化賞という大きな賞を受けられています。

石垣市は、令和2年度の内閣府によるSDGs未来都市と自治体SDGsモデル事業に選定され、日本の自治体の中でもその取り組みが大いに注目を集めている町です。本日は、松田先生に、その石垣島の多様性と歴史、特徴、文化、地域の諸課題などについて、ジャーナリストのお立場、視点から私たちの知らない石垣島の姿、知られざる石垣島を語ってくださるのではないかと想像しています。本当に楽しみです。今日もたくさん学んでいきたいと思っています。

なお、ご質問等がある方は、遠慮なくチャットにお書

きください。講演のお話が終わったタイミング、一段落したところで、司会者・コメンテーターの山川先生がその中から適宜選んで講師の先生にお答えいただくという形を取らせていただきます。本公演会は、内容を文字起こしして編集を加えた上で冊子の形で刊行します。その点につきましてもご了承いただければと思います。

以上、かなり長くなってしまいましたが、開会のごあいさつと趣旨説明とさせていただきます。それでは、司会者でコメンテーターの山川和彦先生にバトンタッチします。山川先生、よろしくお祈いします。

**山川** 白山先生、ありがとうございます。ご紹介を預かりました、日本言語政策学会会長をしています、山川と申します。本日は、今説明がありましたように、松田良孝さんにご講演いただくことになっています。ご質問等ありましたら、チャットでお寄せいただきたいのですが、今回は研究者の先生方以外に一般の方々も結構入っています。ですから、専門的な質問というよりは、少し易しい表現でチャット等にご書き込みをいただければと思います。

それでは、松田さんにお話をいただきたいと思います。松田さん、よろしくお祈いします。

**松田** よろしくお祈いします。早速、画面の共有をさせていただきます。改めまして、今日はよろしくお祈いします。松田良孝と申します。すでにご紹介いただいた通り、元新聞記者で、台湾を拠点にしてフリーで活動しておりました。ただ、コロナの関係でいったん日本に戻っ

ていて、私は実家が埼玉県なのですが、今は埼玉県のほうからお話をさせていただいています。

コロナはもちろん大変困ったことで煩わしいことですが、地理的な隔たりや時間的な制約がインターネットによって解消されたという点だけは良かったのかなと思っています。そういうことがあって、今回のようなお話の機会を頂きました。本当にありがとうございます。

早速、本題です。私は、沖縄の石垣島で20年余り新聞記者をやっていたということもあって、どうしても話の起点が石垣島になります。石垣島に加えて、石垣島から台湾を見ること、台湾と沖縄の関係などにも関心を払いながら取材活動をしてきていますので、今日は、台湾と沖縄、台湾と八重山・石垣という視点から少しだけお話をさせていただければと思います。

本題に入る前にという感じなのですが、オリンピック・パラリンピックが終わりました。1964年、前回の東京オリンピックで聖火を持たれた方たちは結構取り上げられていたのですが、実際どういうオリンピックだったのかということあまり紹介されていなかったと思いますので、そこから申し上げます。

聖火は、沖縄から到着しました。どこから来ているかというと、今日の演題と関係があると思いますが、そのときは台北から聖火が沖縄に運ばれて、そこから本土に行って東京に行くというコースを通っています。これは当日、沖縄で発行されていた夕刊の紙面です。こういう形でももちろん大歓迎されていて、日の丸が聖火ランナー

第31回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会

多民族社会としての  
石垣島から考えるSDGs



2021年9月16日  
松田良孝

東京五輪  
聖火リレーは  
沖縄から



1964年9月7日付「琉球新報」夕刊

松田 良孝  
MATSUDA yoshitaka  
さいたま市出身



中華民国外交部フェロー (2019)  
(MOFA Taiwan Fellowship Visiting Scholar)

2016年8月～ 台湾拠点に活動  
1993年2月～ 八重山毎日新聞 (沖縄県石垣島)  
1991年4月～ 十勝毎日新聞 (北海道帯広市)

東京五輪  
聖火は  
台北から到着



1964年9月7日付「琉球新報」夕刊

の通る沿道を埋めるという光景が見られたそうです。

ただ、私が取材をしていた石垣島、八重山地方の場合、今回のオリパラでは聖火が来ているのですが、このときのオリンピックでは聖火は石垣島まで行っていませんので、オリンピックの熱狂とは少し離れたところにいました。

当時の沖縄の状態がどういう状態だったかといいますと、皆さんご存じだと思いますが、アメリカの統治下にあったので、パスポートを持たないと本土には行けないという状態でした。ですから、八重山から東京まで行ってオリンピックを見たいと思う人は、先ほどお目にかけた身分証明書をもって、つまり、国外に出るような形で東京に向かっていました。

実際に見学ツアーに参加した人たちの実名のリストがニュースになっています。つまり、それぐらい大きな話題だったわけです。

なぜこれが大きなニュースだったのかというと、この当時は、まだ東京からのテレビ放送の電波が石垣島まで到達していないのです。ですから、石垣島の人は、原則としてテレビでオリンピックを見ることはできませんでした。沖縄本島までは電波が来ていました。聖火が到着するのが9月7日ですが、その6日前の9月1日に、本土からの電波を受信して見るための設備が沖縄本島では整いました。ですから沖縄本島では、オリンピックを見ることができました。

しかし、八重山では見る事ができないので、オリンピックを見たい人たちは無理をしてパスポートを取って

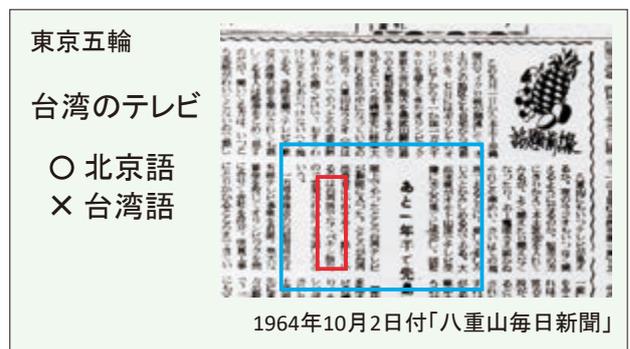
東京に行くか、船や飛行機で沖縄本島、那覇まで行って東京から送られてくる電波をテレビで受信して見るということが行われていました。

それでもどうしても石垣島でオリンピックを見たいという人が結構いたようで、アンテナを担いで山の上に上がって、沖縄本島、那覇まで来ている電波を何とか受信してテレビを見ることができないかという試みをした人たちがいたそうです。これははっきりとは分かりませんが、どうやら成功したようです。

あともう一つは、このスライドでお目に掛けていますが、台湾のテレビを受信するということが行われていました。ただ、もちろん言葉が違って、そのときの新聞記事を読むと、石垣島の台湾出身の方の発言として、「テレビ放送で使われている言語が台湾語ではなくて北京語なので、言葉が分からなくて失望した」と書かれています。

このコラムは、石垣島と台湾についていくつかの情報を与えています。一つは近いということです。代表的な地域として台北を出していますが、このように非常に近い関係にあります。縮尺の関係で実感しづらいかもかもしれませんが、石垣から那覇までは400キロ余りの距離です。それに対して石垣から台北までは230キロ、だいたい半分です。さらに西のほうに行くと与那国島の場合には、台湾と最も近い蘇澳とは111キロと、非常に近い所に位置しています。

先ほどの新聞のコラムは、石垣島における東京オリ



ピックのテレビ放送についてでしたが、与那国島でも当然のことながら台湾の放送を受信できていました。かなり鮮明に見ることができて、街頭テレビという形で人だかりができたと書かれています。

もう一つの情報として、放送が台湾語ではなく北京語だったので分からなくて失望したというくだりがありました。これはどういうことを意味しているかという、石垣島には1930年前後から台湾からの移民が盛んに入ってくるという歴史的な経緯があります。今現在の石垣島の特産品にはパイナップルやマンゴーがありますが、こうした熱帯果樹はいずれも台湾から石垣島に来た人たちが根付かせたものです。それぐらい緊密な関係にあるわけです。

台湾語、北京語という話ですが、台湾語は学校教育の中で使われる言葉というよりは、生活の中で使っている言葉ということになります。1930年代、つまり、日本が台湾を統治していた頃から今現在に至るまで一貫して使われています。ですから、石垣島で台湾の放送を受信したのを見ていた台湾出身者の方は、当然、台湾語は分かるわけです。

ところが、学校教育や公の場所で使われる言葉となりますと、日本統治期には日本語でした。オリンピックが行われた時期は、戦後、中華民国になってからの台湾ということになりますが、中華民国になってからの台湾では今度は北京語が使われていますので、戦前からずっと台湾語で生活してきた人たちは台湾の変化に追いついていきません。ですから、北京語で教育を受けることももちろんできませんし、北京語を使った社会に触れるチャンスがほとんどなかったと考えられます。そういうこともあって、北京語だったので聞き取ることができなくてがっかりというような発言があるわけです。

オリンピック放送を台湾のテレビで見る、聞くというのは、面白いエピソードではあるのですが、実際にそれを聞いた人、あるいは、誰が聞いているのか、その人はどういうバックグラウンドを持った人なのかということを考えていくと、非常に意味の深い問い掛けになると思います。

先ほどの、テレビ放送が台湾語ではなく北京語が分からなくてがっかりしたという台湾の方の境遇を整理しておく、地図で見るとこのようになります。まず石垣島は1964年9月の時点でテレビ放送が行われていないので、日本の情報通信のネットワークから少し離れた所にいます。周縁に置かれているわけです。

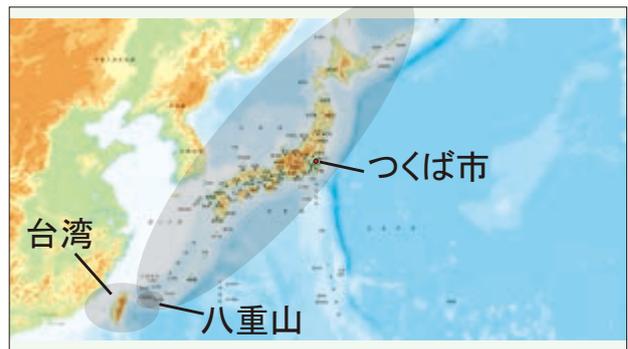
もう一方の台湾から見てみますと、今度は台湾では日

本語から北京語にという言語的な変化が起きているにもかかわらず、石垣に住んでいる台湾の方はその変化に付いていくことができません。つまり、台湾のメインの流れからは外れた周縁の部分にいるということになってしまいます。あの当時、石垣島に住んでいた台湾系の人たちは、日本全体から見ても周縁に置かれるし、台湾という政治的、地理的なエリアから見てもやはり周縁に置かれるということになり、非常に重層的な存在なのです。

そうすると、根本的にそもそも石垣島の人には誰なのかというような問題が出てくるわけです。当然、石垣島に住んでいる台湾の人も石垣島の人といえるわけですが、それだけでは言い尽くせないということです。

これは最近、作家の池澤夏樹さんが「毎日新聞」に書いていた、沖縄で出版された本についての書評です。「市史や町史、村史を持つ自治体は少なくないだろう」。これはそうですね。「それが沖縄ではさらに下位の字のレベルで編まれる」。つまり、地域史というものが細分

	台湾	八重山の台湾系住民		
1945年	日本語	台湾語	日本語	八重山語
	北京語			



沖縄における「字誌」の伝統（池澤：2021）

市史や町史、村史を持つ自治体は  
少なくないだろう

それが沖縄では  
更に下位の字のレベルで編まれる

化されているということを書いています。

沖縄に住んでいる人は、私は石垣島に20年ぐらいいかいませんでしたが、それでもこの字のレベルで本を作るという感覚は非常によく分かります。地元では常識として分かる感覚です。私も石垣島から台湾に出稼ぎや進学に行った人たちの経験などを調べるときには、石垣の市史や竹富町の町史、与那国島町史などを参考にして、個人の体験レベルで沖縄の人たちの台湾体験を調べることがあり、今も市史、町史、字史はよく手に取ります。

池澤夏樹さんがおっしゃっているのは字史ですが、実は小字のレベルまで細分化して地域史が編まれているのが実態なのかなと感じています。これに加えてもう一つ、島ごとの島史がさらにあります。このようになってきますと、例えば「石垣島の人というのは誰ですか」と言われたとしても、字や小字によって来歴や話している言葉、風習が違ってくるので、なかなか一言では答えられないという状態になるのです。

この状態をさらに難しくしているのが、石垣、西表の場合には、1945年、戦後になって沖縄本島、八重山の隣にある宮古地方から多数の移民を受け入れてきたという経緯です。これは1967年の時点でまとめた移民の地域ですが、それぞれ数字で入植した年月を示しています。このような形で戦後になって改めて村が作られたような場所、新しく開かれた場所がいくつもあって、全てではありませんが、これらの開拓地それぞれで地域史が編まれています。

一例を挙げますと、西表島の住吉は、1948年に主に宮古島から来た人たちの地域ですが、住吉には住吉地区の『開拓魂』という70周年の記念誌があります。そのうちの1ページがこちらですが、いろいろなことが書かれています。

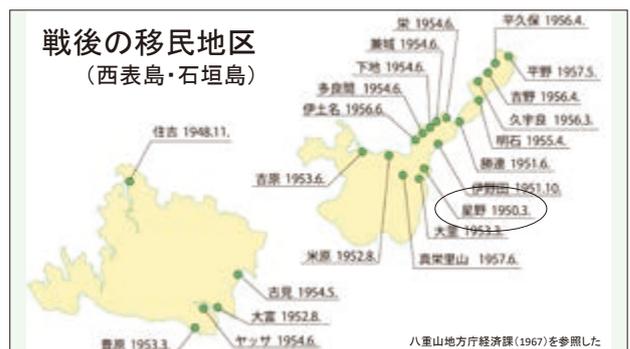
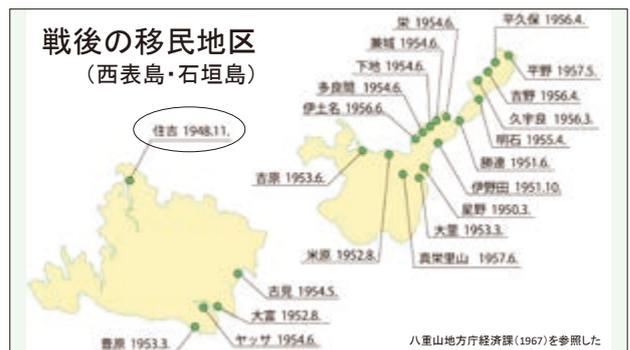
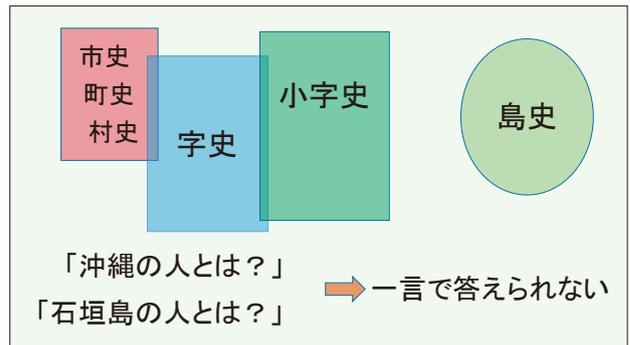
例えば一つを示すと、こういうふうの開拓してきた方たちが、土地に固有の名前を付けていくわけです。それぞれいろいろないわれがあったと思いますが、左上の方位磁石の下の方にミミキリバとあります。牛に目印を付けるために耳を切るのですが、そういう耳を切る作業をやる場所だったので、この場所をミミキリバと呼んだということです。

そういう形で、開拓と開拓してきた後にどういった生活をしてきたのかという、戦後の移民の人たちが自分たちの生活の痕跡を地名、固有の語彙として、その土地に残しているということがすでにこういう形で記録されているわけです。これは西表島の住吉での一つの例です。開拓者ではない人たちが持っている固有の言語があります

が、それ以外に戦後の開拓というところを見ただけでも、固有の言葉が西表島、石垣、八重山には生まれているのだということが分かると思います。

もう一つの見方として、石垣島の星野という地域がありますが、ここは沖縄本島北部の大宜味村から来た人たちが開拓した集落です。

お見せしている写真は、大宜味村の村史の事務局の方がわざわざ星野まで来て、自分の村の出身の人が開いた



村だということ、開拓の体験者の方たちを集めて座談会を開いたときの写真です。この座談会の様子を文字起こしして編集して収録したものが大宜味村史に収録されています。大宜味村は、行政区域の地理的な広がりとしては、沖縄本島北部に位置する大宜味村になります。大宜味村の人たちは石垣だけでなく南米などにも移民しているのですが、村の出身者たちがどんどん広がっていくことによって、大宜味村史が扱う歴史の範囲が広がっていきます。大宜味村史ですが石垣市のことも扱います。逆にいうと、石垣市の歴史だけれども、石垣島というフレームのなかだけで成り立っているわけではないという現象がごく当たり前に起きています。

今は沖縄県内の動きですが、そこへさらに台湾が入ってきます。「嵩張る」の「嵩」に「田んぼ」と書いて嵩田といいます。これは石垣市の字登野城の中にある一つの小字です。嵩田という小字です。ここは1996年に自分たちの地誌、地域誌を発行しています。その名の通り嵩田という地区の記録ではあるのですが、全体を通して読んでいくと、最初のほうで申し上げた1930年代に台湾の人たちが石垣島に移り住んできたというところから年表が採録されているわけです。嵩田地区は台湾系の人たちが今でも集中的に暮らしている地域として知られていますが、自分たちの地域のことだけではなく、いわば同胞、自分たちと同じように台湾から来た人たちの足取りはどのようなものだったのだろうかということ網羅的に収録する地誌になっています。

石垣島の一つの小字の人たちが編集したものなのですが、石垣島における台湾系の人たちや八重山と台湾の関係、さらに、沖縄が本土に復帰するときに台湾系の人たちがどういう境遇に陥っていたのかなど、すごく大きくいえば、政治や外交の大きな流れの中で台湾系の人たちがどういう立場に立たされていたのかというところまで視野を広げたような資料になっています。

これが今現在の石垣市字登野城小字嵩田です。真ん中の所にアンテナが1本、2本立っているのが見えますが、これが於茂登岳です。沖縄県内最高峰で標高526メートルです。この麓の斜面を台湾から来た人たちは開拓してきた歴史があります。

この方は台湾系の二世、つまり、お父さんとお母さんは台湾の出身で戦前に台湾から石垣島にいらしているのですが、その後、石垣島で生まれたという方です。こういう台湾系の二世、三世の方がこの辺りでパイナップルやサトウキビを作っています。

もう少し石垣島にやってきた台湾の人たちのことをお話します。戦前、台湾から石垣島に移住してくると、役所に届け出をしますが、その届け出が今でも石垣市に記録として残されていて、それを一枚一枚めくって行って、台湾から来た人たちが台湾のどの地域の出身なのかを調べたことがあります。そうすると、85%ぐらいの方が台湾の台中、旧台中州出身だということがわかります。

当時の台湾総督府の資料を調べてみると、台中周辺の就学率は全体でだいたい28%です。石垣島に来ている

移民の座談会  
(大宜味村史)

星野(石垣島)  
↑  
大宜味村

嵩田地区(石垣市登野城)

小字嵩田の地誌  
(石垣市字登野城)

八重山の台湾系住民の  
エスノグラフィー

石垣島のパイナップル  
台湾系2世が収穫

方のほとんどは農業関係者として来ているので農村部の出身の可能性が高いのですが、その点を考慮すると就学率はおそらく28%ではなくもっと低く20%か20%の前半ぐらいで、特に女性の場合にはもっと低くて10%前後になっている可能性もあります。そのように教育の機会があまりない所から石垣島に来ています。

日本統治期の台湾の出身者という、たいていの人が日本語ができて日本語でコミュニケーションができてという感じがするのですが、決してそうではなくて、日本語を自由に扱うことができないまま石垣島に来ている人も実は結構いらっちゃって、言葉が通じないことから、それが原因の一つとなってトラブルが起きることもありました。

もう一つ重要な点として留意しておかなければいけないのは、何語であれ文字を扱う教育を受けるチャンスがあまりなかった人たちの集団なので、自分たちで自分のたちの記録を書き残すことがほとんどできなかったということです。

先ほどの『嵩田—50年のあゆみ』の編集に当たった方の話を直接聞いたところ、一部の方はともかくとして、嵩田地区に来た人たちが一緒に自分たちの歩みを作ろうとしても、ほとんど学校に通っていない、文字が読めないという事情があって、記録が全然地域に残っていなかったとおっしゃっています。ですから、書かれた文字によって次の世代に伝えることがなかなか難しいわけです。

そこで、そういう事情を聞いた上で嵩田地区の地域史を読むと、写真がとても重要だということが分かってきます。

これはその地域に住んでいらっしゃる方が撮った写真を地域の人たちで集めて採録したものです。右側にあるのは新聞記事のコピーです。廖見福(りょう・けんぶく)さんという、戦後のパイン栽培で非常に功績があったということでいろいろな賞を受け、石垣島に住んでいる台湾系の人たちを代表するような存在の方です。こういう人たちの記録を残していくために、自分たちで何かを書くということはもちろんなさっていますが、それだけではなく当時の写真や新聞記事の切り抜きが非常に重要な資料として使われています。

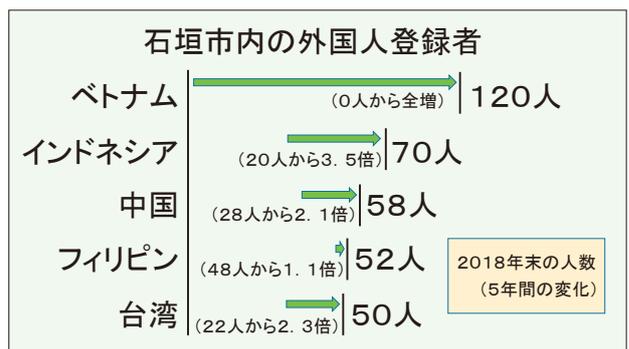
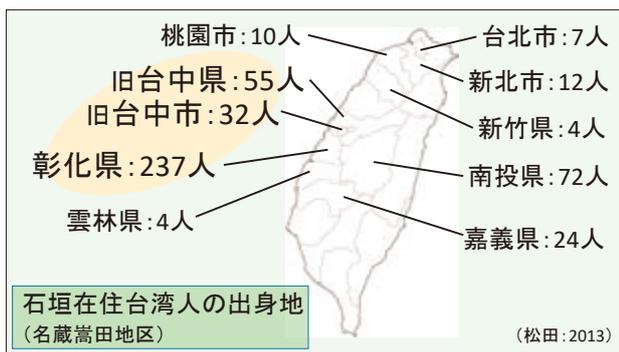
ここで今現在、石垣市内にいる外国人登録者の状況を確認してみます。これは2018年末なのでコロナの直前の数字になります。

特徴としては、インドネシアは、ここ5年間で急激に増えています。これは石垣だけの問題ではないと思われれます。ここで注目しておきたいのはフィリピンです。上から4番目、フィリピンは50人で、過去5年間、1.1倍でほとんど増えていませんが、それでも安定した数字をキープしています。この人たちは主にバブル期にエンターテイナーとして来日して、そのまま石垣に定着した人たちが中心です。

フィリピンの方はフィリピンの信仰を持っている方が多いので、マリア信仰の集まりなどをしているのですが、そういうところにお邪魔すると、小さな子どもを持っている女性たちが非常に多いです。石垣島の在住歴としては20年、30年でベテランです。

石垣島にもカトリック教会が一つあって、その教会に通うことによって、フィリピンの人たちの同郷者同士のネットワークもできますし、これは何人か日本人も写っています。石垣島に住んでいる日本人や日本人の神父の方ともネットワークができます。

フィリピンの被災者と書いてあります。少し前の話な



ので覚えていらっしやらないかもしれませんが、2013年に台風30号のヨランダという巨大な台風がフィリピンを襲ったことがあり、レイテ島を直撃しました。石垣島にはレイテ島出身のフィリピンの方がいて、実家から被災した家族が石垣島に一時的に身を寄せるために避難して来て、その人たちを歓迎するために集まったときの写真です。

信仰による互助的なつながりはもともとありますが、石垣に住んでいるフィリピンの人たちの中にも互助や親睦のネットワークができています。

台湾の人はどういうふうにして来たのかということですが、先ほど50人という数字をお見せしたのですが、この50人というのは台湾籍、正確にいうと中華民国籍を持っていて、国籍が台湾だという人が50人ということです。実際はざっと勘定すると500人、600人の台湾出身者、台湾系の方がいて、その方たちはほとんどが日本国籍を取っていらっしやるので、統計的な数字の上では50人になっているというのが実態になります。

今ここでお見せしているのは、日本国籍を取得して帰化する前の段階に石垣島に住んでいた台湾系の人々が持っていた外国人登録証明です。全部英語で書かれていて、名前の最後のところだけ漢字になっています。大きさは、スマホより少し小さいぐらいの二つ折りのカードで、非常に小さい物です。初期の頃、これを持っていました。

少し時代が進むと、これは1960年代の証明書なのですが、米国政府側が発行した在留許可証と、右側にある

少し大きめの「中華民国護照」というのは、中華民国のパスポートです。これを見るときはつきりと分かるように、沖縄において台湾系の人たちはほとんど外国人、中華民国籍の人として生活をしていたということになります。この後、沖縄が復帰するのが1972年ですので、その直後から日本国籍の取得が一気に進んで、今はほとんどの方が日本国籍を持っています。

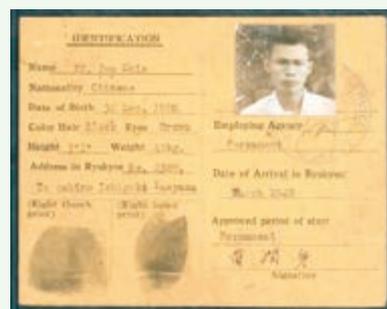
かつては石垣島で生まれ育った二世、三世の台湾系の方が結婚するために、台湾でお見合いをして引き合わせてもらった方を配偶者として石垣島に連れてくるということが結構行われていました。今現在は石垣ですでに築かれている台湾系の人たちのコミュニティーの中に新たに台湾から入ってくる人というのは非常にまれな存在になってきています。観光などの分野でホテルで働くために来ているような方は別ですが、従来築かれてきた石垣島の台湾人コミュニティーに新たに台湾人が入ってくるというケースはどんどん減ってきています。

ですので、私が取材をしていると、この人のおじいさん、おばさんは台湾出身だから台湾系だということは分かるのですが、ご本人はすでにそういう意識はなくて、おじいちゃん、おばあちゃんのしゃべっている台湾語が分からないという方が増えてきているのが実際の状況です。

この図では、上から下向きに時代が進み、1945年を境界線にしていますが、世代が進むに従って、台湾系住民が北京語や台湾語を話すシェアが低くなっていて、



毎月開かれるマリア信仰の集まり



(広田順新氏提供)



フィリピンの被災者をサポート



(島田長政氏提供)

日本語が広がっていくというのが実情です。

とはいえ、やはり台湾語に対する需要があります。例えば、台湾から観光で大型の国際クルーズ船で来る人たちが結構いますが、そういう人がバスツアーに参加するときは台湾語ができる人たち、石垣に住んでいる台湾系人たちがガイドを務めることがあります。タクシー乗り場ではモデルコースの料金を提示するのですが、これは北京語、中国語で書かれています。こういうものがあれば、台湾語だけしか使えない、台湾語があまり得意ではない台湾の人たちだとしてもコミュニケーションはできるということです。

文化に関してですが、ずっと台湾語、台湾語と言っていますが、学校や政府機関とは異なり、伝統的な祭祀や文化に関わる領域が台湾語の活躍の場になっています。

これもかなり古い1953年の写真です。台湾ではお供え物として豚を非常に大切にしますが、そういう伝統的な考え方が石垣島に住んでいる台湾の人たちにも引き継

がれています。これは旧8月15日で、個人的にやっています。

個人的にもやりますし、集団でもやります。場所は、台湾の人たちが自分たちで作った聖地ではないのです。石垣島には、伝統的に信仰の営みを行う「オン」という聖地があります。そのうちの1カ所を借りて、台湾系の人たちが土地公祭（とちこうさい）という伝統的な祭祀を年に1回行ってきた歴史があります。写真では土地公祭という表現は使われていないのですが、今現在は、旧8月15日に土地公祭を行うのが台湾系の人たちの一つの文化的な特徴になっています。今年は21日の予定です。

写真をお見せしますと、これは最近といっても30年前の写真ですが、とにかく豚がたくさん並びます。これは1977年、沖縄が復帰して5年後、戦後になってから30年余りたっていますが、そのときの記事では「ぶた祭り」と呼ばれています。豚を供えるので「ぶた祭り」

	台湾	八重山の台湾系住民		
1945年	日本語	台湾語	日本語	八重山語
	北京語			



です。わざわざ市長が出席しています。

言葉が分からないということで、かつては台湾の人たちが差別や暴力などの標的にされることがあったのですが、この頃になってくるとようやく台湾系の人たちも非台湾系の人たちもかなり融和的な感じになってきていて、石垣市の市長も出席していたということが記事から分かります。

これは現在です。どこのお祭りでもそうですが、一緒



1993年

に食べるのが非常に大事ということで、これは焼きビーフンを作っているところですが、振る舞いをしていただきます。2,000円ぐらいのご祝儀を包んで持っていくのが一つのマナーで、包んで持っていくと、受付の方が折り詰めをきちんと用意してくれて、「はい、どうぞ」という感じで、それを頂きます。お祭り自体は2時間ぐらい続くので、その間、休憩用のいすのところでみんなでおしゃべりしながら食べます。ご祝儀を包むのを忘れてしまった人が来てもきちんと振る舞いをしてくれるので、おなかが空くことはなく、大丈夫ですね。

去年も私は土地公祭を見に行ったのですが、コロナの関係で祭りの場での飲食は行わないことになっていました。最近では爆竹を手に入れるのも大変ですが、手に持っている細長い線香はお分かりですか。この線香も志のある方が大量に台湾から取り寄せたり、あるいは、家庭の中で神様を祀っている方が結構いらっしゃいますので、そういう方たちが持ち寄ったりして、台湾でよく使われ



1980年月日  
八重山毎日新聞撮影

ブタを載せる台  
「チイケエ」



「台湾語大辞典」  
1932年発刊  
台湾総督府発行



1960年ごろ  
平得つぐみさん提供

ふるまい



2007年



“ぶた祭り”  
約60人出席  
「市長が出席」  
1936年から開催

1977年9月29日付  
「八重山毎日新聞」

ふるまい



2015年

ている細長い線香を神様に捧げることが今も続けられています。

祭りには余興が付き物ですが、左奥に見えるのが八重山の民謡を披露する人たちです。台湾系の人たちの知り合いの知り合いの知り合いのような感じで、伝手を頼って八重山の民謡を歌ってもらったりします。これは台湾系の人たちです。フラダンスをやるのが台湾系の女性の間でブームになっていた時期がありまして、そのときに

はこうして披露したりということもありました。

土地公祭の最後は、お供えの豚を解体して、いくつか適度な量に分けて、欲しい人で抽選を行います。あみだくじに名前を書いて分けます。この中に何軒か実際に中華料理屋さんをやっている方がいて、見る人を見るとどの部位がいい、あちらよりもこちらのほうが良いなどがあるようですが、公平にということであみだくじで分けています。

爆竹



2008年

会場全景



2009年

爆竹



2008年

会場全景



2009年

線香



2007年

余興



2008年

線香



2008年

余興



2015年

紙を焼く



2007年

ブタを抽選



2015年

ポエ



2007年



土地公廟を  
個人で建立

ブタを解体



2015年



台湾の放送を  
ラジオで聴く

ブタを抽選



2015年

土地公祭



1960年ごろ

最近では、個人で台湾の神様の廟、お寺を建てる方がいて、去年はこのような形でお祭りが行われていました。

ここまですが石垣に住んでいる台湾系の人たちの祭りの状況です。石垣島で台湾語を話せる方、台湾出身で、台湾語を母語とし、台湾的な祭りの場において台湾語でやりとりできる人がどんどん減ってきてはいるのですが、ほそぼそとですが、今でも続けられてきているということが分かります。

もちろん台湾語だけではなく、八重山、沖縄というくくりで見ても、方言、オリジナルの言葉の危機というのは叫ばれています。与那国島の方言の辞典が最近、新たに出版されていますし、しまくとぅばの功労者を表彰するというも行われています。しまくとぅばというのは、島言葉、島の方言、島の言語という意味です。島の言葉を何とか次の世代に伝えようという動きです。

これは八重山ではありませんが、渡名喜村の人たちが

消滅の危機にある言語・方言

極めて深刻 アイヌ語

極めて深刻 八重山語 与那国語

極めて深刻 宮古語 沖縄語 国頭語

八丈語 奄美語

八重山の台湾語 ユネスコ基準でみると？

5.  
 4. すべての子どもたちが、一定の限られた場面で使  
 用している  
 3. 親の世代以上で使用されており、子どもたちは使  
 用していない  
 2. 祖父母の世代以上で使用されており、親、子の世  
 代は使用していない  
 1.  
 0.



何ができるのか

台湾語空間の可視化

複眼的なアプローチ

希少なことばの登録



日は特に言語や祭祀について取り上げていますが、各ジャンルの多様性のようなものをもしかしたら見落とししてしまうかもしれないと思います。

八重山の台湾系の人たちが使っている台湾語を継承すべきかどうかはまさに台湾系の人たちで決めるべきことなので私がどう言うつもりはありません。ただ、ユネスコの基準を素人的に当てはめると、引き継いでいくのは容易ではないということに気づきます。沖縄で話されている他の言語と同じように、継承することは非常に厳しい状況にある。



もし継承したいと思うのであれば、方法はいろいろあると思います。台湾語が話される空間の可視化、例えば、先ほどお見せしたような土地公祭のようなものにもっとたくさんの人に触れてもらうことです。それから、複眼的なアプローチです。私はジャーナリスト、新聞記者で、言語学者ではないので、台湾語の空間を見たり聞いたりしていますが、詳しい分析はできないので、その筋の専門家たちに見てもらいたいという期待はあります。希少なことばの登録というものについても漠然としたイメージを持っていて、「この言葉はこの先危ないよね」というようなものを何らかの形でリスト化できたらいいのではないかと考えています。

というか、個人的な営みによって辞典を作ってしまうということが沖縄では結構行われています。日本全体の中で沖縄は文化的にも言語的にも特殊な場所なので、日本全体の中で沖縄を意識するという事は、日本全体の多様性を考える上で非常に大事なことだと思います。

時間が迫っていますので、端折ってしまいます。

台湾の原住民族、先住民族は今16あります。政府が認定する基準がいろいろあって、それをクリアすると、既存の民族から新たな民族に分離するという形で民族が

その一方で、私もかつてそうでしたが、首里城やエイサーなど沖縄を代表するものとしてイメージしやすいものに引き寄せられ過ぎると、今度は沖縄の中にある、今



語はどうしたらいいのか考えるときのヒントとしてご紹介しました。

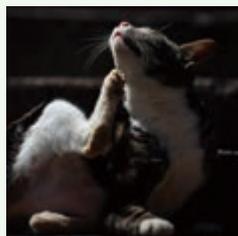
最後に、日本語やうちなーぐちと言ってしまっているのかわかりませんが、大多数の人が使っている言語からだと、使っている人数が少ない言語のことは見えにくいのですが、使っている人数が少ない言語の側から見ると、他の言語はどうなっているのだろうかということは比較的によく見えるという見えやすいのです。

そういう意味も含めて、もし沖縄の状況について関心を持ってくださるのでしたら、メジャーなイメージから少し離れて、石垣島の何とかという集落の誰それたちが話している言葉といったような感じで、小さいところから見ていただけると、もっと新しい発見があるのではないかなと思っています。

最後の部分は少し駆け足になりました。ありがとうございました。

**山川** 松田さん、ありがとうございました。大変貴重でかつ興味深い写真をお見せいただき、お話しいただきました。ご質問等があればチャットに書き込んでください。今入ってきている中で、先ほど石垣島の移住者の件で字の歴史等をまとめているという話がありましたが、字の人口規模はどのくらいかという質問が入っています。いかがでしょうか。

**松田** 数千の所もありますし、百人前後という所もあります。移民で入ってきた人たちの地域は必ずしもうまくいっていない集落もあって、いったん移民してきたがま



お疲れ様でした

た離れてしまったという人もいますので、そうなってくると、地域によっては100人を切ったりする場合があります。

**山川** ありがとうございます。今入りましたが、チャットのほうは見えますでしょうか。豚の飼料は何を使っているかということです。

**松田** 飼料ですか。ごめんなさい。そこまでは確認をしておりません。きちんと調べておきます。

**山川** 分かりました。私から一つ聞かせてください。フィリピンの方々がいらっしゃるということだったのですが、彼らは言葉的にはいわゆる標準日本語なのでしょうか、それとも英語を使うのでしょうか。

**松田** 英語と日本語と、あとはフィリピンの言葉です。例えば、私などと接するときは標準日本語です。ただ、お祈りの場の写真を見せましたが、あの人たち同士で話している言葉は、主にタガログ語とビサヤ語の2種類だという説明でした。

**山川** ありがとうございます。他の方、いかがでしょうか。チャットでなければ、お手を挙げていただいても結構です。

**松田** チャットで一つお問い合わせがあります。

**山川** どうぞ。

**松田** 媽祖の祭りがあるかどうかというお問い合わせです。ありがとうございます。今、媽祖廟を作るための計画が進められていて、確か去年の夏ぐらいに起工式は行われているはずですが、今の進捗状況については分かりませんが、そういう動きはあります。以上です。

**山川** 他の方、いかがですか。今日は石垣からの参加者もいらっしゃいますし、沖縄本島や台湾にいらっしゃる方からもご参加いただいています。どうぞこの機会にいろいろとお聞きになりたいことなどありましたら、ご遠慮なく。

**山本（筑波大学 人文社会系 准教授）** それでは、私のほうから1点よろしいでしょうか。今日はたいへん興味深いお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。とても貴重なお話で、勉強させていただきました。筑波大学の山本祐規子です。

1点、お聞かせください。戦前戦後を通して台湾のほうからたくさんの人たちが移民してきたというお話でした。中でもあまり教育を受けていないグループの方が移民されてきたとおっしゃっていたのですが、彼らにとっての一番のモチベーションはどこにあったのでしょうか。何が魅力でどういった力があって石垣島に移民するという流れになったのでしょうか。

**松田** いくつか要因はあったそうですが、一つはごく素朴にフロンティアというところですか。パイナップル産業を根付かせたと申し上げましたが、まずパイナップルを持ち込もうとする事業者のグループがありました。大同グループという台湾の事業家の集団が石垣島で農業をやるとうとする動きがありました。

その人たちが自分たちの出身地の台中周辺で「一緒に石垣島に行きませんか」「開拓移民と一緒にやりましょう」という感じで募集をするのです。石垣島に行くと土地が手に入るということで、それに応募していったということがまずあります。

これはいわゆるフロンティアへの憧れだと思うのですが、もう一つは意外にもというか、特に石垣島に何かこだわりがあったわけではなくて、港に行ってどこか良い場所ないかなとうろろしているうちに、シンガポールなどいろいろな名前が出てきて、「八重山という所もあるらしいね。行ってみようか」といつて来てしまった人も含まれています。移民研究ではプッシュ・プルなどの要因が語られるのですが、私が聞いたところでは、なかなかそれに収まりきれない人たちのケースが含まれています。

**山本** ありがとうございます。

**山川** チャットのほうに、台湾出身の方々のお墓の作り方に差があるかというお話が来ています。いかがでしょうか。

**松田** 石垣島には、台湾系の人たちのお墓が集まっている場所が2カ所あります。そのうちの1カ所は、完全に台湾系の人たちの墓だけしかないという共同墓地になっています。そこに行き、台湾の人が見ると「日本のお墓だね」と言い、石垣島の人には「このお墓は台湾っぽいよね」と言います。例えば、墓の入り口の門柱に、色彩豊かな獅子の置物があったりするのです。そういうものを見ると、石垣島の人には「台湾的だね」と言うのですが、ただ全体的な感じが地味なので、台湾の人たちからは「日本のお墓だね」と言われます。どちらでもない、どちらでもあるという特徴的なお墓になっています。

台湾系の人の中には、台湾にいたときの名字が陳さんの場合には、日本国籍を取るときに東（ひがし）さんや東（あずま）さんにするケースがあります。その場合、お墓に「東（あずま）家の墓」と書いてあっても、陳という文字をどこかに刻んであるなど、自分たちのかつての名前やルーツが分かるような刻銘がきちんとなされています。

**山川** ありがとうございます。時間になりつつあるので

ですが、もう1件、質問が入っています。先ほどの台湾の原住民族の件で、16あるという話だったと思うのですが、彼らの言葉は方言なのか言語なのかという質問が入っています。

**松田** これは言語ですね。方言という定義ではないと思います。台湾語に関しては、いろいろな説がありますが、一般的には中国語の一つの方言という説明がなれています。台湾の原住民族、日本的にいうと先住民族の人たちの言葉は、どこかの言語、例えば中国語や台湾語の方言ではなく、アミ族にはアミ語があるという形で、それぞれ固有の言語として考えられています。これは私の専門ではないのですが、民族によっては地域によってまた違いがあるという話も聞いています。たぶんそれは方言で、例えばアミ語の方言などになるのではないかなと思います。ここはあやふやです。

**山川** ありがとうございます。時間になりつつあるのですが、今回は多民族社会、石垣、SDGsというキーワードがありました。たぶん多くの方々にとっては、石垣島と聞いてリゾート地で、多民族の社会、あるいは、移住者から成り立っているというイメージはないのではないかと思います。

そういうところで、今日、台湾のお話とフィリピンの方々のお話をさせていただきました。

SDGsというキーワードは、環境問題だけではなくて、その地域にいる人たちを誰一人取り残さずに、という発想がありますので、日本国内の民族、あるいは、地域に住んでいる人たちの将来的な持続可能性を考えるという意味で、今日のお話は非常に興味深いところだと思います。

先ほどユネスコで八重山の台湾語をどうするかという話が出てきました。例えば、ドイツでは国境の変遷の中で少数民族が出てくるのですが、そのような方々の言語を国がきちんと認めて、政府がどのような所にどのような言語があるということをきちんと示してきています。そういうところは、日本の場合には残念ながらまだないように思います。

今日お話を聞いて、参加していた方々、皆さん、改めて石垣島の認識を新たにし、また、研究をされている方々は、皆さんの研究テーマと同じようなものが場合によっては石垣島にあると感じられた方もいらっしゃるのではないかと思います。

一番初めに白山先生からお話がありましたように、今日の講演の内容はしばらくしますと、文字起こしされて冊子としてNipCAのホームページにアップされると思

います。もし聞き逃し等ありましたら、そちらをまた見ていただければと思います。

時間が押してしまって恐縮です。本日は松田良孝さんに非常に貴重な講演をいただきました。私からも御礼申

し上げます。どうもありがとうございました。

それでは、皆さま、これで本日の講演を終わりにしたいと思います。また次回よろしくお願ひします。それでは失礼します。



## 第31回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会

# 多民族社会としての 石垣島から考えるSDGs



講師  
ジャーナリスト  
松田良孝氏

1991年4月に十勝毎日新聞社(本社北海道帯広市)に入社し、政経部記者。1993年2月から八重山毎日新聞(本社沖縄県石垣市)の編集部記者。現在はフリー。

『八重山の台湾人』(2004年/南山舎)で第25回沖縄タイムス出版文化賞(正賞)、『八重山毎日新聞』の連載記事「生還一ひもじくて“八重山難民”の証言」で2010年の新聞労連第14回ジャーナリスト大賞を受賞。

司会・コメンテーター  
山川和彦教授(麗澤大学)

沖縄県石垣島は、伝統的な固有のコミュニティのほかに、沖縄県内の他の地域(本島、宮古)からの移民による集落があるほか、台湾やフィリピンなど言語・文化的なバックグラウンドの異なる人々が形成する人的ネットワークが存在する。沖縄へのまなざしがとらえる視野のなかで、島が内包するこうした多様性はပါတタイムのしか顕在化せず、首里城やエイサーなど沖縄全体をイメージさせる表象の後景に退きがちで

ある。日本全体においては沖縄を意識することで多様性を考える手掛かりが得られるが、沖縄の入り組んだ状況に目を向けることによつて多様性は豊潤化していくであろう。石垣島の多民族性を読み解きながら、SDGsが謳う「誰一人取り残さない」の意味を考えていきたい。その際、ひとつの手がかりとして、沖縄の隣に位置する台湾における原住民族(先住民族)のポジションを概観する。

2021年9月16日(木)  
オンライン開催 15:15~16:30

土地公祭とは、台湾入植者による豊年祭にあたる行事のこと。戦前、台湾から石垣島に来島した農業入植者の、精神的よりどころとなっていた。



土地公祭(通称「ブタまつり」)



お申し込みはコチラから

※参加自由・無料



[共催] 日本言語政策学会多言語対応研究会  
[協力] 日本・中央アジア友好協会(JACAFA), 筑波大学 国際局, 学生部, グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会, スーパーグローバル大学事業推進室, グローバルリーダーシップ教育プログラム, 人文・文化学群, 社会・国際学群, アルマトイオフィス, タシケントオフィス

[問合せ]  
筑波大学 NipCA プロジェクト  
<https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp>  
TEL: 029-853-4251  
Email: [info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp](mailto:info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp)

※当日ライブ視聴できない本学学生・教職員の皆様のために manaba にて無料の動画配信を予定しております。詳細は、講演会后 NipCA プロジェクト Website にてお知らせいたします。

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」主催  
公開講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」  
第 31 回 (2021 年 9 月) 多民族社会としての石垣島から考える SDGs  
ジャーナリスト 松田 良孝

---

2025 年 3 月 21 日

監 修 臼山 利信  
編集・校正 梶山 祐治 (主担当)、徳田由佳子 (副担当)、山本 祐規子、谷越 祥子、  
笹山 啓  
発 行 者 臼山 利信  
発 行 所 筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」  
茨城県つくば市天王台 1-1-1  
Tel: 029-853-4251  
E-mail: [info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp](mailto:info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp)  
Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>  
印刷・製本 メディア情報株式会社

---



筑波大学  
University of Tsukuba

---

**筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」**

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学  
Tel. 029-853-4251  
E-mail: [info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp](mailto:info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp)  
Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>

---



公開講演会シリーズ第31回のテーマカラーは、国連が定めた17の「持続可能な開発目標 (SDGs)」のうち、「目標14. 海洋と海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」のアイコンの色を基調としています。